ベストクラス選定理由書　　作成者：澁江靖弘，山端真司，吉水裕也

科目名称　　社会の中の言語文化 （担当教員名：　菅井三実　）	
課　　程　：　学部１年次	開講時期　：　前期
授業形態　：　講義	授業規模　：　81 人以上
インタビュー対象教員名　　菅井三実 （実施日時：6 月 24 日（水）13 時～14 時；実施場所：教育・言語・社会棟 2 階）	
インタビュー対象受講者名　　矢野新菜 ，山本真由 （実施日時：7 月 8 日（水）12 時 30 分～13 時；実施場所：事務局 2 階中会議室）	

選定理由

受講生１３０人中１００人以上が１年生であるこの授業では，高校の内容を超え，さらに高いところから見るような授業，つまり大学らしい授業づくりが心がけられている。

授業では，世界には４桁の数の言語があり，歴史的に見ると家系図のように言語が分かれたり消滅したりすること，日本は１つの言語の国ではないことなど，言語に関する基礎知識が扱われている。それらの内容を通して言語について相対化すること，そして，言語についての視野を広げることがねらいとされている。学生は外国語と言えば英語だと考える傾向があり，またそれが標準だという意識がある。例えば，日本語と英語を比較すると，日本語の語順と同じ言語が半数位で，英語のような語順を取る言語は相対的に少ないことや，スペリングどおり発音しないという点でも英語が特異な言語であることなど，学生の常識とは異なる興味深い内容が豊富な資料（毎時Ａ４で５枚程度）と共に扱われている。また，１年生が多い授業であるため，レポートの書き方も詳しく扱われている。大学生のレポートとして成り立つように，導入，結果，考察という形式や，参考文献の書き方，「　」の使い方，段落の作り方などを，過去のレポートをサンプルとして検討しつつ扱われる。学生は，この授業で学んだことを他の授業にも生かしている。

授業では，学生にできるだけ話しかけたり，揺さぶりをかけたりする工夫がなされている。ワイヤレスマイクを渡す，ランダムに指名するなど，対話をする工夫である。学生が発言するように，学生からの質問の良さをほめるなどのことも積極的に行われている。

学生は，これらの工夫を肯定的に受け止めており，思考することの楽しさを味わいながら積極的に授業に参加している。例えば，方言を題材にした授業では，母音の多い・少ないなど方言は自分にとって身近なものだと感じたり，方言は地方によって意味は同じでも言い方が異なること（例：捨てる，ほかす等）や分布に規則性があることを学んだり，まわりの人とも考えたりする時間がとれたことや，積極的に調べたことを通して，自分たちの言葉を見つめ直す機会となったようである。

授業の目標が明確に設定され，それが学生と共有された上で達成されていると考えられること，基礎的かつ自分自身が使っていることばを相対化できるような内容を提供していること，受講生が考えることを楽しみながら言語に関する視野を広げることができていると考えられること，考えるための手だてを意図的に組み込んでおり学生が楽しみながら参加していること，からベストクラスとしてふさわしいと考える。